



—東地中海地域ニュース—

パレスチナ・ペーパーの漏洩

主席研究員 中島 勇

カタルのアル・ジャジーラ放送は、1月24日から中東和平に関する漏洩資料の報道を開始した。同放送は、過去10年間の関連文書で約1600本、6500ページの文書を入手したとしている。

中東和平交渉では、公の部分と非公開の部分がある。今回アル・ジャジーラ放送が暴露した資料が、本物であれば非公開部分の記録になる。90年代からの中東和平交渉の経緯の中で非公開部分の記録がメディアで報道されるのは初めてになる。パレスチナ側は、文脈を無視して報道しているなど苦しい反論をしているが、まっかな偽者であるとまでは発言していない。アル・ジャジーラ放送の報道は政治的な理由によると反論し、欧米の人間が資料を漏洩させたとしている。誰がやったにしても、パレスチナはメンツをつぶされ、恥をかかされたことになる。

公開部分での発言や議論が、非公開部分では異なるのは当然だろう。公の発言と非公開部分での発言が同じであれば、交渉は成立しないし、交渉する意味はない。パレスチナ難民についても、伝統的な概念で帰還権を主張することと、アッバース大統領が発言したとされる「数百万人の難民が帰還すると考えるのは合理的でない」との発言の間に矛盾はない。帰還権の解釈には幅がある。帰還権を履行することは、すべての難民がイスラエルに戻ることを意味しないし、百万単位の難民がイスラエルに帰還することは、現実的には不可能である。パレスチナ難民への世論調査では、イスラエル帰還を希望する難民は少数との報告がある。難民の意識が変われば、帰還権の解釈も変わる。難民を別の形で補償する選択肢はある。また帰還権を徹頭徹尾拒否するイスラエルが、パレスチナ難民の移民を年5000人とか1万人認めると発言することも矛盾しない。イスラエルとしては、難民がイスラエルに移民として戻るのであれば、帰還権の行使にはならないとの解釈は可能だ。

アル・ジャジーラ放送が漏洩した記録が本物であるとすれば、非公開部分での交渉は、常識的、実務的かつ真剣な議論が行われていたことを意味する。イスラエルのオルメルト前首相は、首相ポストを離れた後、2008年にはかなり踏み込んだ議論をしていたと公式に述べており、今回漏洩された記録とも状況証拠は矛盾しない。他の内容も、中東和平に係る専門家や有志の政治家たちが公式・非公式に議論している内容とさほど違いはない。2000年夏に最終地位交渉が開始され、すべての議題がテーブルの上に乗せられた。この時点で、議

論をすることがタブーとされる問題はなくなった。中東和平交渉に内在する諸難問は、政治的、知的束縛から解放された。その後、10年間にわたり、これらの難問について、さまざまな視点から徹底的に議論され、知恵が積み上げられてきた。今回は、その一部が表に出たことになる。

一般のパレスチナ人の反応は、まだ確定していない。漏洩直後の報道では、失望する人、怒る人、「やはり」と思う人がいる。今のところ、街頭での大きな抗議行動はない。西岸のラマラにあるアル・ジャジーラ放送事務所に押しかけたパレスチナ人がいるが、流血の事態には至っていない。パレスチナは、アル・ジャジーラ放送を非難しているが、事務所を閉鎖していない。ハマースは抗議行動を呼びかけ、26日には、ガザで数千人規模のデモがあった。ガザの住民が激怒しているのであれば、この程度のデモではすまない。イスラエル政府は沈黙している。イスラエルの左派系の新聞ハアレッツ紙の社説は、「交渉相手はいるではないか」と書いた。同紙のパレスチナ専門の記者は、「公然の秘密」だと論評した。米国は、協議が複雑化したとコメントしたに留まっている。アラブ世界、イスラム世界でも大きな動きはない。